

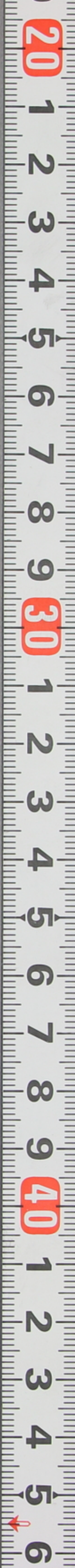


繪本漢楚軍談

二編

九

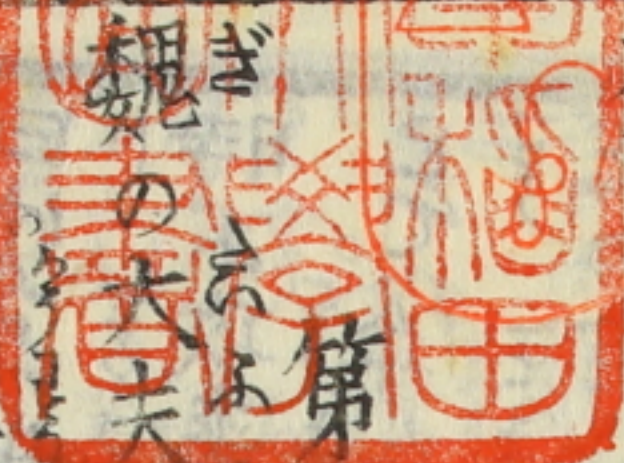
~ 13  
3565  
19





門 13  
號 3565  
卷 19

訂正 繪本漢楚軍談第二輯卷之九



東武

鷓鴣貞高纂迹

第五十三回

張良說破申陽 佯為擒

魏の大夫周叔へ張良の說破らるる半服をかくるも猶未ど争  
へんと項王の人となり勇猛にして力強く當る所敵なくして今戦國の  
中と雖も肩を双ぶ人もなし。縦令漢王仁ありとも争う項王と衡を争ひ  
雌雄を決するを得んや且西魏へ項王の恩を受ると有るも漢の然  
る徳をも受む恩ある不叛き徳なきは就く豈理ありと云べけんや張良又曰  
ける項王勇ハ孟賁ハ勝り力ハ烏獲ハ過と雖も人の小なる過を咎め  
人の大なる恩を忘る齊梁の兩國ハ恩有るて過なきは今兵を起し之を伐つ  
且も安きとなく朝夕の替るが如し我此国を察する亦無事あると

大英堂藏

早稲田 大學 図書館  
昭和 34.6.3 燹  
藏 書



わらど項王齊梁と平げり勢の衆トて攻来らん其時魏王何方の  
扶を恃て防ぎ玉ふ其急の臨んで大夫亦何の計ある小義を守りて  
大事を忘るる豈大丈夫の心らんや斯まを理を尽しても大夫の未だ  
會得せむと言誥らるて周叔の黙然として言なく暫時頭を擡げ  
得ざる魏豹の愈堪へ難子房我爲の長久の良策を陳しけるを  
汝如何ぞ無礼なる言を出して支ゆるぞと周叔を追退け決然として  
曰ける我張先生を紹介して漢王の降る時へ縱令項羽が數十万一  
時の攻来るとも漢王の力を借りて防ぐと安るべし此久遠の計あり  
と降参の表を作り貢の用意を急がせけり張良徐の申さる大  
王の言誠の當り萬世不窮の計あり今周叔が臣と争ひも他のあ  
らざる君と思ふの忠心事何とぞ叱り懲り玉ふぞ彼亦利害を辨て

君の心に従つ降表を齎らして臣と共に咸陽へ赴くことを宜らめと張良の一  
言の魏豹の怒も打解て次の日周叔を召出して事の趣を告ぎ周叔慚  
愧して張良の高徳を数回拜謝して表を持ち貢を捧げ張良と手を携へ  
咸陽の地へ赴き張良己の咸陽の都の来りて城外の周叔を首め置き  
漢王の見へけり漢王の張良の思ふに増て日を早く取り玉ふと喜び玉ひ  
自ら手を執り席の招り平陽の首尾に如何ぞと問玉へ張良其事の緊  
急を介々と奏しけり漢王の大に喜悦し玉ひて左右の命を下し周  
叔を召入て對面ありて齎せし表文を披き見るふ  
西魏王豹頓首稽首上言派流支遠而終歸巨海羣燕飛  
鳴而必棲梁棟魏處西隅未沾王化仰聞漢徳日升川至如  
制服三秦而章邯投首仁昭百粵而齊楚畏威天下反心諸



候順附豹等願從王命任爲驅使土地人民皆屬統理惟  
王奉納臣豹不勝佩服感戴之至

右の表文を見了りて漢王の限りなく喜びひらいて周叔の齋に来りて  
名馬白璧又種々の貢を受け周叔を近く召し酒宴をぞ賜ひける  
賓客の禮を以て飲食器用に至るまで皆漢王と替ることをなく其饗  
應の忠いふ周叔の感激心の中心思ひけるいふ漢王の寛仁の長者の  
有けるぞ其身諸候の上の立ち項王と衡をも争ふ程の尊き身にて纒の  
西魏の大夫たる賤き我身を對待の客礼を尽しつゝ張良先生の宣し  
言端も違ふと深く感服しうければ益身を謙退して辱きを拜しけり次の  
日ふりて周叔の身の暇を乞んとて張良の委ねける子房其儀を肯て  
漢王の奏しけり乃ちこゝを聴しひ手自ら返簡を調へて周叔の恩

賞の賜を贈りけり周叔の恩を謝し西魏の反りて魏豹の見る  
漢王の盛徳を称しけり魏豹大の喜びて返簡を披き見る  
其文の曰

漢王千書拜付西魏王足下邦聞王之名久矣乃  
周畢公之裔世爲賢王德被魏土誤爲楚屬今知  
其非幸蒙不棄與漢結好協力贖襄以成王業凡  
有謀猷相賴輔翼疆宇弘開咸反一統懋著元功  
魏基布展帶礪山河共享富貴如艱險有時誓與  
爲助王其堅之

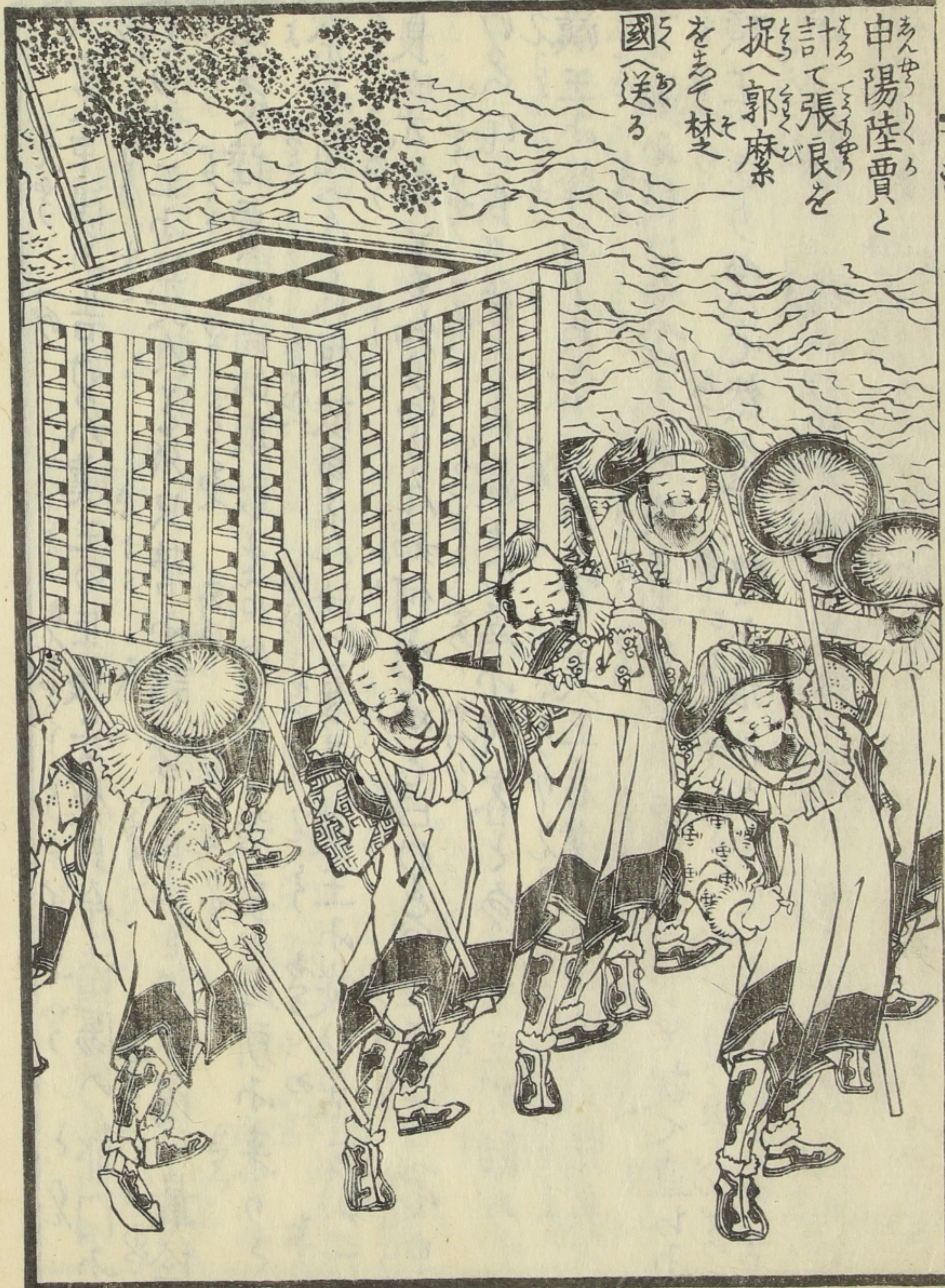
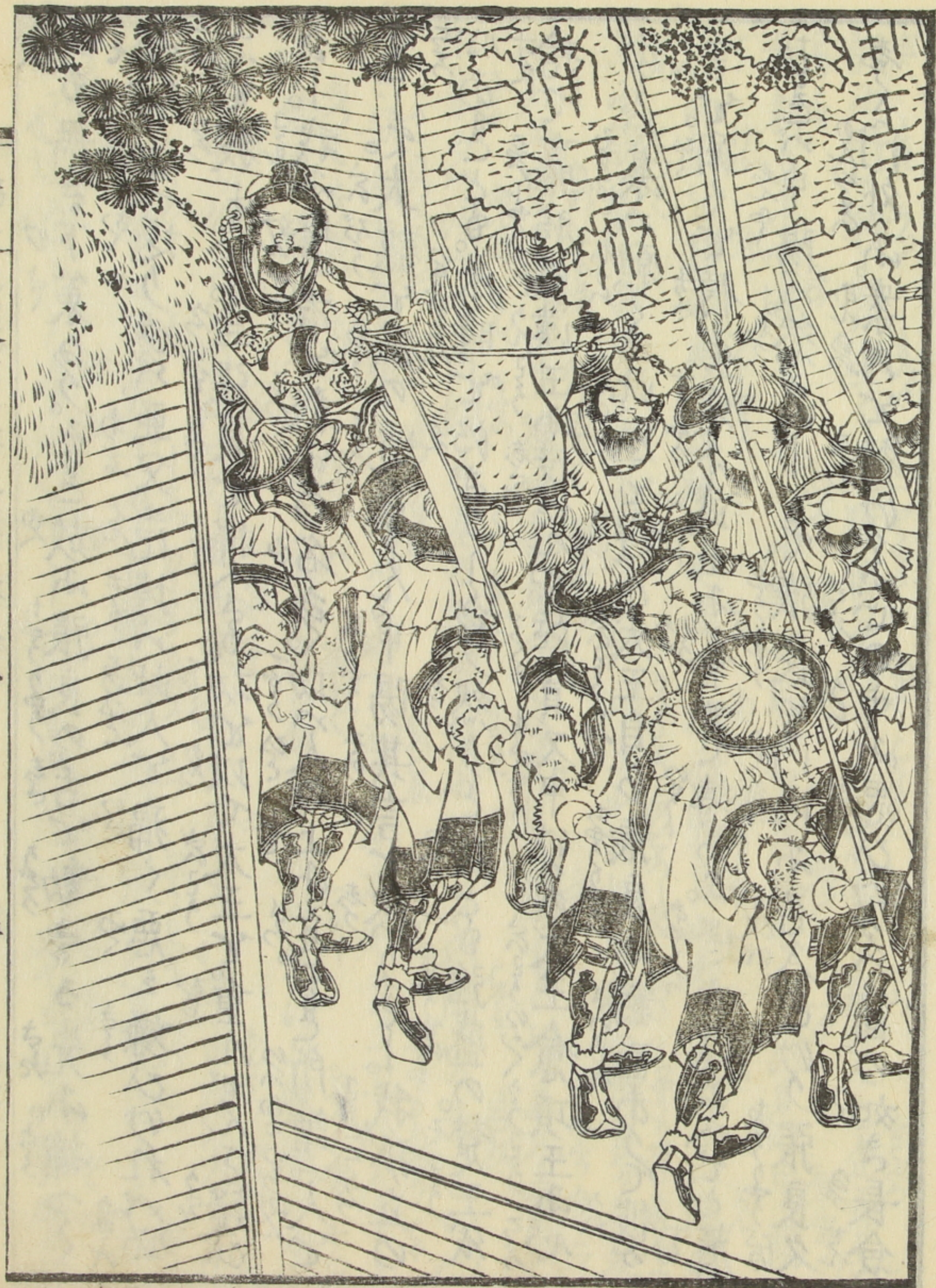
魏豹のこゝを見了りて深く漢王の徳の服し此より西魏の  
要害を諸將の命せて堅く守らせ漢へ歸まるの證を顯し赤幟を



建て項王の叛きける。然而張良の三寸の舌を以て千乘の魏  
 國を漢の版せむと。河南王申陽へ我強暴を恃ととして隣國の  
 威を振ひ驕奢淫佚を事として。漢王を見て鴻毛より輕んじ侮  
 して從ふ。然りとて項王の屈服する心もみけは孤立て國を建んと  
 漢楚二王の動靜を竊の伺ひ居うけり。張良猶も亦申陽を降  
 さんと心の中巧きける。魏豹を降せし如く。容易く服従せん  
 事難るべしと打案す。漢王の別を告げて發途けるが竊中の樊  
 噲と漢嬰とを召集て秘計を授け三十余騎を引率して如此々々  
 甘々と低語て張良の故の從者五六人を左右して。洛陽を指て趣きぬ。此  
 時河南王申陽の陸賈を召して只二人額と合せて他事もなく國の  
 政事を相議して。坐も靜々の語らひける。折節外臣内臣

入りて申陽の告げける。漢王の臣張子房。只今洛陽の都門に  
 到り。大王の見へんと。只管小請けりと申けり。申陽の最怪  
 きて。陸賈に向ひ取敢て問ける。今張良が此所小来りて  
 余小見へんと。何故多ん。汝の曩昔漢王の從ひ居られ張  
 良が才能も知りつらん。如何ぞやと曰けり。陸賈答へて申  
 ける。張良が来りて。漢王の為小説客とあり。大王と勸めて  
 漢王の降らしめんが為あり。大王若漢王の心あり。張良が  
 言端小役ひめべ。若項王の心あり。速小張良を捉て直ち小  
 項王へ送りあひて然るべし。怒小張良を説て一度聞時の辨舌  
 小心を動も。我小あつ見識も。彼が為小奪はして終小其理  
 小役ふあり。二心起る。只我小害あり而已めて利張失ふ。おの





申陽陸賈と  
 計て張良を  
 捉へ郭縻  
 をあて楚  
 國へ送る

繪本漢書軍謀二卷第六

文彦堂藏



上も無き下策あり。そと故に張良の舌を動かさる先小捕へく  
 楚の方へ送りあり。亞父范増は此人を痛く悪く嫌ひければ必  
 之を殺すべし。且張良を捕へる。功を以て大王と重んぜんを疑ひ  
 あり。我の賢者と殺すの名あり。功人の上小立こそ所謂一人を  
 害して大謀を成の道ありん。申陽其言を然りとす。我孤立の  
 心ありとも。未時をばざりあり。然りと雖も強盛の楚王城  
 捨て羸弱の漢王小役んや。陸賈又申ける。大王愈項王小心  
 あり。某へ願ふ此座を避ん。大王自ら張良小對面ありて彼が  
 言を聞く待む速小武士小命せて縛めよ。過る為ありと。薦  
 むとば申陽は然る。張良を門内小召入とけり。張良久  
 あり門外小案内を待ける。心の中小思ひける。箇の如き長食

我料り小違へむと。心小計を定め置き。徐々に入らば申陽  
 手小劍を提げ。殿上小坐して声と奉げ。張良此処小来り。漢の  
 為小説客と。きんとの事あり。項王此項擧と傳へ張良が在処  
 と知る者へ速小生擒て。彭城へ送る。と。觸らとける小不意此  
 小来る。汝が運の傾き尽る処あり。我小取りて。國さる。幸この小  
 べき。兵共めて張良を縛めよ。と曰声。左右より二十餘人。手と  
 小金吾縲と。携へて跳りお。容易と。張良の少  
 あり。騒ぐ言とも。出さば。冷笑あてて居る。申陽は大喜。小  
 大将郭縻と召あり。士卒百餘人を授け。張良を驚固く。彭  
 城小送る。と。命令と下し傳ふ。陸賈申ける。郭縻の



軍更小長... 應對少の拙け... 項王の前小出て事と成  
と難く... 某も俱小行き... 項王小對面して大王の這面の功  
城見小告... 且小項王の奔梁と伐め小消息と聞出... 兼く亦  
范增と好と結び彼が心と安んぶべし... 申陽へ之と聞限り  
喜びて禮物と取備へて早く小打立せしむ... 郭摩と共小路と急  
ぎ五十里計り行けり... 忽然とて鼓と撃ち... 鑼と鳴り... 一彪の  
軍馬路と遮ぎりて... 真先小進... 一隊の大將と覺し... 大  
音揚て曰けり... 這所小来... 軍勢の何との圍の兵も... 擒  
へ一人の誰人そ... 其人の猶更小馬武具も其供小渡して往  
久命と助けて這地と通し... 否と曰べ一人も生て通す  
ところト... 覺悟せよと呼はし... 郭摩の念然と怒て起... 欲心

熾盛山賊共武具小目の暗く... 可惜命と顧ぶる我へ洛陽小  
名と知らし... 大將郭摩小ありけり... 今主君河南王申陽の  
命と受け漢の張良と面縛して彭城へ送り... 爲警衛の爲小  
百人の士卒と率ひて附添ふ... 汝侘如耳目有ら... 楚の強大  
ちて河南王の勇猛と知らざらん... 遅く退け我勢と遮る時の  
痛へ... 頸と刎んと威張り... 押通りんと味方の勢と勵ま...  
鑼と鳴り進まん... 喊きけり  
張良が河南王と降さんとて阿女と縛り... 元来  
是巧も... 計あれど危き事小非ざらん... 計行る縛も解  
ぎ... 方一行る時の空... 螺練の中小死さん... 欽計の時宜  
と知りて行ふ... ぎとあま... 殺令遇りて其事の成びと曰ふ











翼と添ふが如く。飛鬼の陸賈の生擒て去ると訥る。汝申  
 陽へ具小聞て大に怒り。其強き大将と誰あるか知らぬ。鬼  
 神虫非ざるん。郭摩へ常小似合ざる。不覺と取らるぞ。我其所不往  
 向ひて彼と誅と我耻辱と雪んぬ。汝と憤立て千騎餘と引卒と  
 先の林の傍邊と尋ぬる一人と一人も居らば静あり。傍人小尋  
 ぬる今朝一隊の兵士等馳通り。其後通り。兵多しと  
 答ふる小申陽へ猶豫と霎時其処小佇立て案。陸賈が存亡心  
 許る。其在所と探んと洛陽の大路へ出さる。商人と覺き者五  
 六人連立て通る者ありけし。申陽へ馬を駐めて汝等へ今来り。路  
 少く箇様の怪き兵小遇へせ。汝等と問ゆる未だ遇むと答へけし。申  
 陽へ怪し。馬と走り五里をり。来り。日既小傾きて漸路り

昏ぐりて。往先も分る。心苦しく思ひけり。傍る坡の下より。  
 一声の鉄炮と響くと火把と振り照し。一人馬を馳寄せて。我大  
 漢の大将めて。樊噲と呼者あり。今汝が頸を取ら。此で截るより  
 易けし。張子房の仁に依て。汝小首と預け置ると。雷の鳴る如く  
 大音小呼へ。申陽圍らばも膽を消し。魂を失ひて急小逃んと  
 馬の鼻と向んと。四方より。伏兵起りて申陽を八重九重小  
 取圍め。張良の山の間に陣を備へ燭と燃し。中央小坐し。申陽  
 へ面縛して引来し。張良へ其繩と急小解て上座小置て申けり。  
 漢王本より大王と力と合せて項王と征討して天下の為小害除  
 くと欲し。某を使小使とて。此意と達せしめんと。申大王却  
 て某と捕へて楚圍小送らんと。某初め洛陽小入らんとし。ける時小





樊噲謀を  
領掌あて  
郭麻糸を斬  
て張良を  
救ふ



臨んで大王及び陸賈等。此般多巧と察し知りて  
 其計の裡と欠く準備とて。如此との事と樊噲の計にせしむ  
 あり。今陸賈の過と改めて大王の命と救はん。其兼に樊噲  
 小命と傳へて殺伐の暴虐と止め置ぬ。漢王の素有徳の仁君  
 渡らせぬ。項羽の強暴の獨夫あり。足下若心を改め。漢王  
 長久も。河南王の位と安んじ。富貴子孫小傳ふべし。と張良の  
 言と汲取り。陸賈の膝と漸進めて申陽小曰ける。大王必  
 教小役ひあへり。若漢王反りぬ。固安き而已あり。百姓皆安堵  
 あり。長く諸侯の位小安んじ。壽と保つ小至らん。況や大王  
 洛陽の都へ竊小  
 指向て一舉小城と攻取り。大王（漢王）令反らんと欲しぬ事

ありとも。何処へ反りぬん。樊噲必ぞ大王城斬んと（言）責らぬ。  
 某深く張先生小懇懇小乞請て救ふと欲しぬ。漢王へ人  
 為り。寛仁大度小在。大王懇々思ひぬ。と理せめて曰けり。申  
 陽へ二人の言小服とて大（漢王）喜び。事勢既小此の如し。我何ぞ漢王  
 小反降せむ。又孰小反降する。と有べき也。暫く洛陽の城へ反り  
 陸賈とて咸陽小使せり。降参の縁由と奏す。張良へ手紙  
 拍て萬歳と称し。曰大王既小大漢小反するの心と起しぬ。王の幸  
 而已あり。洛陽の民の幸あり。大王是より反城せ。某も同く行て  
 民と治めて其後小陸賈と伴ふ。咸陽小赴く。とて申陽小附屬  
 て洛陽の城外小到りけり。城上り大漢の赤幟と立連ぬ。其の  
 勢めて固く守り。灌嬰へ樓櫓小登り。大音小呼つけり。我張子房の



計と受けて。此城と拔取りし。来る者へ誰人ぞ。符をけし。城  
門城関くと能く云声。申陽へ之を見て。且敬馬。且怪。張良  
へ誠。是神通の人。多と思ひて。後と顧。張良既。馬を走  
城門。到り着て。門を閉。内。入。軍民と撫。慰。法令。整  
と。正。申陽。嘆。申。漢王。能。人。用。此。是  
知る。張良。後。進。灌嬰。制。申。輕。敷  
入。俄。拔。城。恐。人心。の。変。ず。も。氣。遣  
某。既。一。陣。搆。へ。四。方。守。り。大。王。子。房。と。共。此。陣。中。小  
居。申。陽。倍。敬。馬。嘆。漢。王。此。の。如。き。名。將。の。多。く。必。む  
天下。と。取。り。ぬ。んと。矢。と。折。て。誓。と。大。丈。夫。の。一。言。の。金。石。も  
も。猶。堅。何。ぞ。変。ず。と。あ。ん。や。城。郭。既。漢。小。属。を。諸。侯。疑。ひ

ぬ。あ。と。云。け。外。小。城。外。小。一。隊。の。軍。勢。陣。と。取。り。旗。幟。と。立。連。之。  
意。氣。盛。多。と。告。げ。張。良。の。樓。櫓。を。登。り。臨。見。る。敵。の。あ。り  
で。漢。の。大。將。周。勃。と。柴。武。の。兩。人。も。真。先。小。馬。強。立。て。樓。櫓。向  
の。申。け。軍。師。曩。昔。咸。陽。と。出。ぬ。已。小。日。と。経。事。と。も。い。ひ。て  
消息。無。き。伏。小。韓。元。帥。の。心。強。勞。若。過。失。も。あ。ん。欽。と。某。二。入  
小。三。十。餘。騎。強。授。け。ら。せ。迎。へ。さ。せ。ぬ。ひ。ける。小。某。既。小。潼。関。まで。支  
来。り。事。の。形。勢。と。窺。見。と。軍。師。の。疾。く。洛。陽。と。取。り。申。陽。と。服  
せ。ぬ。あ。ひ。ける。と。聞。一。程。小。驛。馬。と。飛。一。五。百。里。の。路。と。一。晝。一。夜。の。内  
小。咸。陽。の。都。まで。報。知。し。某。侍。の。先。生。と。迎。ん。為。小。城。外。小。一。隊。の。兵  
と。七。と。相。待。多。と。告。げ。申。陽。聞。て。大。小。敬。馬。を。門。を。閉。く。迎。へ  
入。と。酒。宴。と。設。け。て。餐。應。々。互。小。誠。と。罄。一。け。り。張。良。次。日。申。陽。と



陸賈と張敖伴ひて咸陽と指て打立ける。申陽陸賈相共小咸陽小  
 入りける。漢の軍馬整々と文官武夫列と並べ嚴然とる。敬馬さ  
 る。殿門小伺候しけし。漢王へ張良と招きあひて。如此との概略  
 張。聞了りて宣ひける。若先生の妙計微く争でり一挙兩得して  
 平陽洛陽と服とまきと。其大功と數回賞讀て言ひ止りける。  
 然後左右小命と傳へ申陽陸賈と招がせらる。申陽乃階下小  
 来りて。稽首して再拜と漢王へ礼と正して申陽小宣ひける。賢  
 王洛陽と治めぬ。威名遠く顯し。朕是故小張良張使としく  
 好まぬ。結ひ交りと厚せん。總小利害說しむる。幸小拾ぬ。必  
 許容ふ及びらる。朕深く久懐と慰むる。不堪らる。申陽奏し  
 て申ける。陛下の聖徳日々小盛ふ。天下の民父母と慕ふ。如し。

臣何ぞ心と尽し。漢小服して天命小後む。方と非ざらんや。陸賈傍小拜  
 伏して慙入る。体と多。漢王近く召玉ひ宣ひける。人各其主あり。く  
 其人と輔る。張忠義と云。汝へ本洛陽の人。小の。朕と辞して本國  
 へ反り。小申陽と輔る。理の當然と謂ひ。豈他人と輔る。理ある。  
 今日又申陽小。後にて来り。小。天小順ふ。道多。朕敢て罪と責む。  
 汝必愧べ。く。陸賈頻り小拜謝して。羨聞小及びける。臣陛下  
 小。後。三年の聖恩と蒙る時。如何と忘る。小。非。事。ども。  
 臣故郷へ反りける。父母年老て且貧く。口張糊ふ。小苦。とける。我  
 申陽深く憐れ。扶持の仁と垂れ。小。其恩張謝せん。とて申陽小  
 對面せ。小。恩愛小誘さ。小。惡々として光陰の過る。忘。とて  
 陛下の命張傳る。小暇。今日天顔張拜。小。罪誠小万死小



當且る。然るも鉄鉞加へぬむ。却て撫恤の思張受く。是  
 陛下天地の量覆育の仁ありとて退きまは漢王の左右命ト  
 て殺死陳ね。酒と設けて君臣と召集へて樂と奏し。甲陽孤客  
 座に請ト。厚く饗應し。與て尽し。次の日申陽の暇と賜ひ。奮  
 の如く。洛陽の都へ返し。陸賈と首め。韓元師の麾下に属せ  
 中大夫の職務と授け。詭客の事と司どり。平陽洛陽の兩  
 君も既し。漢の反し。咸陽の勢へ愈盛ふ。愈強く。諸國の君  
 民風と望と。來服する者多くと。旭の天み外多と。楚の勢へ  
 漸々。與國叛きて。孤立の如く。心ある人々。只漢の與と喜び  
 楚の衰つ。孤を取分て。悲しむ。のへあつ。けり  
 漢の與り。楚の亡る。人力の爲を所みあ。天の助る。処あり。然り

と。又ども不仁なる。天必む與せざし。仁ある者。み与むと。ん  
 昔孟軻氏の宣ひ。人道と得る。のハ助多く。道と失ふ者。ハ  
 助寡し。助寡きの至。ハ親戚も之。ハ畔く。助寡きの至。ハ  
 天下之。ハ順ふと。漢高へ古の湯王武王の徳さし。雖も  
 寛仁大度。ハして。能人と用る。の器量あり。是故。ハ天下の  
 人才。自ら漢の反。を平陽洛陽の反降せし。張良の  
 計。ハ出と。雖も。畢竟。是漢高の寛仁。ハ反せし。あり。  
 力強し。と曰。と。又ども。限ある。の。色。ハ本頼難し。と。ま。  
 徳ハ廣大無邊。ハして。人を化。まると。深け。色。ハ之。ハ敵。まると。  
 者。ハ有し。王者の仁と。不仁と。を合。せ。見て。人々。ハ我。心  
 徳。を養ひ。る。ハ天道。ハも。叶ふ。へ。古の軍記。及。ハ。禪



史と讀とも善悪勸懲の理を辨る是亦一種の心  
學なり。漢楚與亡の事の付て心法の支の渡るも童  
蒙と導く老婆心の贅言を免く

第五十五回 王陵竭力迎太公

別緒 發說漢王へ咸陽の在して勢益盛るる各國の諸  
候我先の風と望んで來服する。涸魚の水の趣く如く  
放鳥の林の及るが如く誰か能く禦ぐ者ありん大元帥韓信の  
諸將を集めて曰ける。今漢の威徳を見る。日々盛なりて  
月々の新なり。主上頗る東征して。項羽を伐んと欲し玉ふの  
太公と始御一族皆豊沛の御座の是。常々慕ひ奉りて  
哀と玉ふ是故太公と密に咸陽へ迎んと御心を腦しける。

諸將如何思ひつる。各所存を包まざりて計畧あり。述より誰  
早く功を建て主上の心を安んじべきと四邊を見廻し陳けし。席  
上の連つて人々顔を見合せて言を吐き人々さみ。唯王陵進み出某  
曩昔南陽の謀叛の諸候の兵を招き野伏兵を集し時周  
吉周利と名を呼し兄弟と深く交り其人と爲すを能知りぬ。  
此二個の力強く心剛にして且麾下の二千余騎の兵あり常々  
山林の深く隠し軍士と共に田苑を開き事無き時耕し耨り  
事ある時軍士を集り強敵を破り堅陣を陥し向ふ所勝る  
よ。民を懐け族を親し郷里皆服従ま。数年の間人馬  
共の強壯にして此頃へ其麾下の従ふもの二万余及びと聞ぬ。  
然るも舊來して義を守る者。是人の頼も事などい。



辞退るるを無し然るを不義の與し暴強の劫まるる倭諛  
 人のあつざむべ其此兄弟を相語らひて密かに豊沛へ趣  
 きて太公及び御一族を迎來り奉らん心安く思し王へ然し  
 むがら敵國の中間者ありて味方の内を穿鑿探索もの  
 わるべ這密計頭を楚の兵若追來らば周吉周利の委ね  
 置き敵兵を防かぬ其の太公を守護して其場を逃るべし  
 元帥の諸將を擇び命を傳へて半途まで出迎へさせ玉へ然る  
 時へ難無くして咸陽へ引取ん今若遙々此地より迎の勢を  
 遣らば項王必を聞知りて兵を出して急を遮り奪ひ取るをも  
 むらん此議の如何思ひ玉ふを韓信答て申しける此計極く  
 妙策多し足下若此を成就其其功の開國の第一の褒

賞を漢王の申下し參らせんと事次第を漢王の奏しけ  
 る漢王一方を喜び玉の朕懷中在ること已三年の  
 及びぬる哀慕の心絶ぎて日夜の父の事を而己忘れ難く  
 思ひける王陵も此事を成就せば朕何ぞ患る有べきや  
 心を安んじて楚を伐べしと王陵を近く召して自書簡を認  
 めて王陵の渡りける王陵へ拜謝して其書簡を請取りて  
 商人の体を出立て徐州を指て発途けり此時彭城の項王の  
 命令を受けて諸大将精兵を引卒して齊梁の兩國を攻  
 めける馳驛へ櫛の齒を挽か如く西魏王魏豹河南王  
 申陽近頃漢の及降して近隣皆争ふて服しぬると告げし  
 項王大に驚きて范増を召て申ける齊梁久し我命の



背くを以て此日頃兵を起して攻めあひる。又西魏河南も漢の反降せし上、韓信兵を擧げて褒中を出し、以て來へ勢ひの乘じて我地を侵し、七千余里を奪ひ取り、我速の韓信を誅戮して其後の西魏の地、河南の境をも一擧の征伐せんと欲せし。此議如何思ひつる。范增答へて曰、けるへ今楚の諸大将、精兵数万を引率して力を竭し、心と勞し、齊梁を攻ると、虽も破るべきを得ざりけむ。楚國の兵、多く疲れ、武具兵糧の至るまで、其費數へ難し。且國々の諸侯も亦楚を叛ひて、漢の反を是亦味方の衰弱する。大王、輕々しく咸陽へ向ひ、王の彭城へ空虚にして、恐る守ると難く、人如し沛縣へ兵を遣し、漢王の一族を彭

城へ迎取つて、人質とし、諸方の守の勢を置き、若漢より兵を出さ、其一族を殺さんと、さる勢を示し、漢より兵を向ん、王を憚るべきと、さる暫く齊梁の平定を待つて、其後、漢王と伐王の楚の費少く、項王此義を然ととして、大将劉信の歩卒を千余人授け、與へて沛縣へ行、以て漢王の一族を奪取來るべしと、命令し、けむ劉信へ急ぎ彼方へ馳向ひ、家を囲みて、太公及び一族百二十人を擒み、豊沛を離れて三十里余、歸り、処の茂く、林の中より、一色の鉄砲の響と、共一彪の軍馬、駆出て、鬼神を欺く、大将三人、馬を進めて、色を懸け、汝等何とて漢王の一族を奪ひ、さるや、速に渡さむんべ、悉く殺さんと、呼つる、色を



劉信へ怒の堪ざらば荒らば我楚國の項王の命令と  
 受けて太公を捕へて歸りける所は汝侭の何者か路を  
 遮り無礼の所爲傍邊より薙倒し一人も餘さぬと  
 大音の罵る三人の大將へ冷笑ひて物ともせ無益ある  
 汝侭が首と失んを痛へしを云々馬を走らして十合余り  
 戦ひしが劉信と一鎗の刺殺し楚の勢と追ひ散して太公を  
 檻車より扶け出して地上の稽顙し再拜して申しけるは臣  
 驟に走來り幸みして見奉る太公の榮福我侭の僥倖  
 若半日遲滞其逆徒の爲の勾引せし如何とも爲  
 べき様か一是誠の漢王の威靈なり太公既の檻車  
 乗り如何なる憂患の逢へん歎と心を焦し玉ひけるふ

思ひかけり援兵の來りて我身を救ひしう最不測なる  
 夏ると訝しげの問ひけるは三人の將軍の如何なる人候  
 ぞ此所來りて老翁が危きを救ひしう何が爲の有る  
 ぞ一人の大將進み出答へて申しける様は臣乃ち沛縣の  
 王陵と申す者是る二人は南陽の周吉周利と申す者  
 なり漢王の命を受けて密に迎へ奉らん爲の來りける處  
 楚より兵を指而捕奉るる幸みして天より助けて今  
 日此路に出合ふ若不幸にして逢ふを得ざりし太公を  
 囚徒と爲る而已らざらば臣等の罪何を以て償ふことを得  
 けんや再漢王の見んと心苦しうける如斯奇遇の漢王  
 の洪福なりいべけん暫くも留らば又危きともあらん路を



急ぎて咸陽へ納奉らんと三人へ力を併せて太公を擁護して夜を日継ぎ豊西の地を打立けり。劉信が敗軍の士卒等の散々を彭城へ逃返り具の事の趣を承々と訴へて豊西の茂林の中にて盗賊に出逢て劉信が討てし事あり。漢王の一族百二十人残りなく奪ひ取らる。盗賊等は何方へ影もなく失うると告るを聞て項王の大に怒りて曰ひけり。我彭城の近き邊に豈左計の盗賊ありんや。是必漢の兵ありん。定めて咸陽を指て行べ。急ぎ蹤を追うけ。擒めせよ。と諸将の中にて英布と鍾離昧を撰り出。三千余騎を授け色二個の即時に出陣て飛が如く追ひ蒐る。王陵へ楚國より追兵の蒐らん王を思ひ日夜を分を

馳けるが老少男女を伴ひ急を走りてを得。辛ふて河南に至り。高城の邊近く来りける。後より馬烟を起て来る者あり。王陵之を顧みて周吉周利の御ぎ楚の追兵間近く来り。足弱の人々と伴ふて御ぎ難し。我の太公を擁護して路を急ぎて落行べ。汝等二人は此処に留り一戦して防ぎ留りよ。踏止つて敵を禦も。此所を捨て君を守らるも落さば同ト谷川を越へて漸々逃延びけり。周吉周利の一議も及ばぬ。此所止りて敵を支へて戦いんと兵を指麾して待蒐る。程なく楚の勢焔く如く押来りて先隊に進み大將英布後陣の大將鍾離昧孰も楚國の名を得る。勇猛の丈夫あり。士卒は先

繪本漢楚軍談二輯卷之九





漢王の命を承り  
 王陵劉太公を  
 迎へるの所



周吉周利  
 命を捨て  
 是を保  
 護



立ち馬を進め大音の呼つるに汝等の尋常の野武士山賊の  
 よもあつた逆主劉季漢王を徒黨して老奴を奪取り  
 咸陽へ行つるべし我眼のくる間に其の渡をまじ速に  
 出まふ於ては汝が一命を助くべし若し隱匿事あり先汝が首を  
 切て其後を奪ひ取らん周吉周利兄弟に此大言を聞く  
 よりも怒氣骨髓に徹しけむ進み出て曰わん我漢王の  
 命を受けて太公を迎へ取り咸陽へ納奉んと此地まで守  
 護する汝等無礼と振舞て行く路を遮りて太公を渡せ  
 兵何が為し曰けるめや強て求め汝が今無礼と述べ舌を  
 抜きて漢王へ奉獻し出合へよと曰程の太公を抜て斬て蒐  
 集し英布の怒りを顯へし兩の眼に日月の光り輝く

黒髪に冠を衝ぎ勢ひめて數十斤の斧を提げ周吉周利と  
 渡り合ひ一往一來一上一下彼方の獨龍の天上に飛がごとく  
 此方へ兩虎の風を嘯く如くみて孰も優り孰も劣らん五十  
 余合戦ひける未雌雄を分ざりしが楚の勢俄に金を鳴して  
 軍を引揚げ兵を休まば英布の遺憾けむも詮方なく引  
 退き訝々しく思ひながら何と勢を引揚しぞと問の後陣の  
 鍾離昧其疑ひ然るを敵の後を伺ひ望む馬烟の  
 起けむに思らる漢の伏兵敵を援るも有ん況彼兩將の  
 勇猛侮るべき者なれば如く一先彭城へ戻りて後項王の  
 きて重ねて計を運らし兎も角も征伐せし英布重ねて曰  
 ける我足下と二人めて此野を押し来り眼前敵を見て豈



空しく反らんや。縦令敵の軍勢の重なると有とのみとも何の  
 怖るを軟有ん力と齊へて攻んとて。鼓を擣て突て蒐るべ  
 周吉。周利怒せり。馬を進めて蒐出る。殺氣盛み天を  
 突き。黒烟を立て。操合ふ所。鍾離昧の後陣を駆て急め  
 進め。先隊の英布へ愈氣の乗り。周吉を馬上より斬て  
 落せ。弟の周利へ兄の討るを見るよりも愈怒の堪む  
 ちて。縦横の驅立は。千勢の四方に散乱して。備も乱  
 けり。鍾離昧の士卒を下知して。八重九重に取囲。雨の降る  
 如く。矢を放て。周利へ背をまう。射貫きて真倒れ。落  
 ける処を追蒐て。英布へ首を搔めけり。猶又追立々々て手  
 痛く攻む。周吉が三千の軍勢も一人も残らざり。討はけり。

ひ。亦の傾きて。漸々暗夜の成けは。英布へ山の傍に陣を  
 取つ。人馬を休め。篝火を焚て。兵糧を士卒に分ちて。某の功  
 績を賞せしが。鍾離昧の曰ける。英將軍の勇猛。今初め  
 見ゆ。今日漢の二將を討し。古今の秀。一功の。烏獲孟  
 賁の勇をも争う能及ぶ。英布答へて曰ける。某如何の勇  
 りとも。若足下の後陣を駆けて進。玉ふ非んべ敵を撃破る  
 べし。誠の難きとあるん。鍾離昧又曰ける。向ふの遙けき塵埃の紛  
 紛と起りし。敵勢多く集るる。今夜若夜襲る。蒐るも  
 憂へ。其準備を成王へ英布も尤み。と領養て。千配を定めて  
 要害を堅固の守。諸軍ども。終夜寐もせざ。篝火を焚  
 り。五更の鐘の貝を鳴し。兵糧を遣へ。爽明をぐる頃を待ち



鳥の翔るより疾く追駆行く王陵へ太公を守護ありて路を  
 急げど心の先走りて足弱を伴ひて果敢ども後より追  
 兵の來らんを憂へけり種々の心配りて又一つ計を設け  
 山際の樹木の茂り地を見立て縛の兵を残り置き旗を梢の  
 縛り付け疑兵を成して偽らんと怪しげに備へしが蹤を慕ひ  
 英布が一軍遙み之と臨見て計有んやと訝り恐るて軽々しく  
 進むを得ざりしに王陵へ辛ふと暫落延びしうといふも心の  
 更の安んずる敵の形勢を伺ひて人馬とも休めんと地の利を撰  
 みて息を収めんと心構を成ける味方の勢の撃洩さるる  
 兵ども走り來りて昨日の戦ひの周吉周利の勢が及て戦死し三千の  
 軍兵も残りなく撃つと告げしに王陵へ大に驚き斯く追兵の來る

更程経るに有まどと取りのめ取めむ兵を下知と馳行が  
 曩の茂林の残り疑兵の爲の支へらる楚の勢暫時猶  
 豫せし幸の二日を経て漸々洛陽の近づけ少し心を安んず  
 忽ち後陣より楚の軍勢驟しく追ひ來りて喊を揚げ山を  
 崩し谷の響き地上の墜る雷よりも震懼しげに聞へけり王陵へ  
 事の斯く急迫りしを見て如何せんと思案みくるに後の山より一  
 彪の軍馬躍り出て慕ひ來り楚の勢を目懸て支ゆる二人の大  
 將戦を舞して勇を振ひ一人も通をまどと鋒鋭く撃懸る王陵へ  
 最怪しと顧見し豈國の敵兵ありとぞと大漢の赤熾るれば  
 始めて心安着て先に進み大将を誰と見え周勃と陳武の両  
 將るれば喜ぶと限るし是れ氣を得て王陵も士卒を令して喊を

漢書卷之九 十四 大漢軍談



作り鼓を鳴して洩さどと勇を進んで戦ふ。英布の數日遠路を経て追来り。上は昨日周吉周利と戦ひ上下悉く疲し。けは三方の敵を受け防ぐと成さず。散々乱立して逃んとす。洛陽の申陽へ大軍を引率して本道より掩殺し七十重二十重の取巻て一人も余さずと探さる。英布の愈力極り。左りの衝き右の突き流石の猛き英布の色ど新平の兵の攻ら。且て防戦太甚悩ま果て進退自由らさむ。漢兵の爲の擒とる。全體の見へぬけり。

訂正 繪本漢楚軍談第二輯卷之九



